



## お話と幼児教育

渡辺桂子

人間は、おしゃべりの動物だといわれます。「お話」が好きです。世間ばなし、人の噂話、ニュース、政治、あらゆる話を聞くことが好きです。しゃべることも好きです。小説を読み、映画や演劇、ラジオやテレビを見たり聞いたりして楽しむことも、けっきょくは、お話が好きな人間の性向のあらわれではないでしょうか。お話を聞くことによって、私たちは経験を拡充し、お話をすることによって、さらにその経験を確かなものとして、「どう生きようか」の生活を続けているのではないのでしょうか。

子どもも、お話が好きです。成人にとらず、いや成人以上にお話が好きなようです。

それは、人生経験の浅い、そして、日ごとにぐんぐん伸びていく子どもの、生きるための経験拡充の、もっとも手っとり早い生活であるからかもしれません。また、成人よりも語いの少ない子どもの、ことばへの無意識の拡充意欲ももなっているかのようです。

文字を読む——という能力のほとんどない幼児は、よくに、この傾向が強いです。幼児の経験拡充は、ほとんど「ことば」でこなわれます。「お話」でおこなわれます。

だから、私は幼児教育でもっとも大切なことは、「ことば」の教育であり、「お話」の教育だとまで考えております。

私は、幼児の経験拡充のために、いろいろなお話をしたいと考えます。人間の、いろいろな生き方を表現したお話をしたいと思えます。動物のお話でも、植物のお話でも、王さま・王女さまのお話でも、私ども人間が、＼いかに生きてきたか＼いかに生きているかを話の基盤に考えて、幼児の「生きる」ための、伸びるための、育つための、経験を拡充してあげたいと念願します。

もちろん、幼児の心理や、生活を考えて、それにマッチする話であり、形であり、表現でなければいけないことはいうまでもありません。

だから、私は、既成のお話でも、私の教育の場に利用させていただく場合には、私の組の子どもに適当なように（教育価値、利用価値のあるように）再構成してお話します。

できるだけ、私の創作で、目的を達したいと努力します。そのために、私は童話の創作の勉強をはじめました。勉強をつづけております。

幼児は、「ことば」に対して、たいへん敏感であります。「ことば」を自分のものにしようと、あらゆる機会に耳をすまします。

私どもの「ことば」が、幼児にどのように吸収されるかを考えるとき、幼児教育の「ことば」や「話」のもつ重要さを切実に考えます。

したがって、「お話」のことばについては、たいへん神経を使います。正しいことば、美しいことば、適切なことば、むだのないことば――そうしたことに十分の注意をはらって、幼児の「ことばの教育」のためにも、お話を使うように心がけています。また、

「ことばが人間をつくる。」

私は、お話をするときに、お話を作るときに、いつもこのことばを心にとめております。

幼児童話

タロウト

くろねこクロツペ

おとうさんは会社。おかあさんは買い物。ペランダのねいすで、おじいちゃんはひるね。その足もとで、くろねこのクロツペもウトウト。

庭では、百日草やカンナの花までがトトロ。  
「つまらない……」

おじいちゃんのそばでたったひとり、絵本を見ていたタロウがいました。

タロウは絵本をおくと、クロッペをだきあげていました。

「クロッペ、水あそびしよう。」

けれど、ねむたいねむたいクロッペは、

「ニャゴ、ニャゴ」

おこつて鳴きました。

タロウは、クロッペを庭の池へつれていきました。かえでの枝がはりだして、小さな池の上には、涼しいこかげができていました。

タロウは、クロッペをたいてジャボジャボ池へはいつていきました。

「クロッペ、おまえに泳ぎかたおしえてあげる。」

タロウは、クロッペを水の中へいれました。

クロッペはびつくりぎょうてん。

水の中でとびはねました。冷めたい水しぶきがバシヤリ、タロウの洋服をぬらしました。

「さあ、クロッペ、泳げ泳げ。」

タロウは、クロッペのまえ足をもつて、クロッペを泳がせようとなりました。けれども、水がだいきらいなクロッペは、いよいよあばれだすばかり。それでもタロウは、クロッペをはなしませ

ん。

「さあ、泳げ泳げ」

ブルン、ブルン、クロッペはめちやくちやにあばれます。

あばれて、タロウの顔に水しぶきをバシヤリ。

こんどは、タロウがおどろきました。

「ばかあ、クロッペ！」

とうとうタロウは、クロッペをはなしました。

そのすきにクロッペは、むちゅうで逃げていきました。

クロッペは、池の外へとびだすと、なんどもなんどもブルルルと、からだじゅうをふりました。そのたびに、こまかい水のしぶきが、ガラス玉のように光つてとびました。

それからクロッペは、

「ミューン、ミューン。」

と鳴きながら、垣根の方へあるいていきました。いつもは、つやつやとしているくろい毛が、ベタリとからだにはりついて、とてもなげないかっこうのクロッペでした。

タロウは、クロッペが少しかわいそうになりました。

「クロッペ。」

池の中で呼びました。けれどもクロッペは、

「ミューン、ミューン。」

と鳴きながら、まつばぼたんの咲いている垣根のむこうへ見えな

くなくなってしまいました。

タロウは、池からとびだしていきました。

そしてもういちど、

「クロッペ！」

と、呼びました。

ひとりぼっちのタロウは、またベランタへもどりました。

おじいちゃんは、まだねむっていました。

タロウはおじいちゃんのように、ねいすによりかかってみました。

青い青い空が見えました。するとその青い空から、笛の音が聞こえてきました。おどっているような笛の音でしたが、あまり小さな音なので、タロウはじつと耳をすまして聞いていました。

笛の音は、だんだん近づいてきました。そうしてとうとうおしまいには、もう空からは聞こえずに、タロウの家のおもての方から聞こえてきました。

タロウは、ねいすからとびおきると、家の外にでていきました。

「やあ！」

タロウは呼びました。家の前の一本道。その一本道を、緑と赤のしまもようの洋服を着たおじいさんが、おどりながらやってく

るのです。まっ白なかみの毛が、銀の色に光っていました。おどけた笛は、おじいさんが吹いているのです。おじいさんは、その笛にあわせておどっているのです。おじいさんのくつはだぶだぶぐつで、ヒョコラヒョコラと足をもちあげるたびに、いまにもぬげて落ちそうでした。

タロウは、すっかりゆかいになってしまいました。おじいさんが、タロウのすぐ前まできたとき、タロウは、

「バチバチバチ……」

と、手をたたきました。

おじいさんはいつとき、笛を吹くのをやめて、タロウに笑いかけました。そこでタロウは聞きました。

「ねえ、そんな赤や緑の洋服を着て、おじいさんはまほう使い？ それとも手品のおじいさん？」

「おだまり、坊や。わたしはねこのおもりをしているんだから。

わたしのねこは、わたしの笛の音を聞くのがだいすきなさ。」

「ねこだって、おじいさん。ねこなんてどこにもいやあしないのに。」

タロウは、ふしぎにおもって聞きました。

「ねこがいなくて……そんならまあ、ちよいと見せようか」

おじいさんはそういうと、上着のポケットから、ひょいと一匹のねこをだして見せました。それは、青い目のまっくらなねこで

した。

「あつ、クロッペだ！」

タロウはおもわずいいました。

でもふしぎなことに、おじいさんは、あとからあとからおなじようなくろねこを、小さなホケットからだしました。おじいさんのだしたねこは、みんなで七匹でした。みんなおなじようにまっくろでしたが、七匹のねこそれぞれが違った色の目をしていました。その中でクロッペにいてるのは、青い目のねこでした。

タロウは、おじいさんにいいました。

「おじいさんに、ほんとにまほう使いなんだね。ホケットからこんなにたくさんおじいさんのねこをたづねて……でも、その青い目のねこは、ぼくのだよ」

「いいや、わたしはもうすつと前から、七色の目をした七匹のねこをもっていたよ。」

「そう、ずっと前から。じゃあやっぱりおじいさんのねこなんだね。」

タロウは、とてもざんねんでした。

「そうともさ。これはみんな、わたしのかわいいねこども」

おじいさんは、ごきげんでした。そふしてまた、さっきのように笛を吹きはじめました。おじいさんのおどけた笛がなりだすと、七匹のねこたちもいっしょにおどりだしました。くろいねこたち

はうしろ足で立ちあがったり、長いしっぽをふったりして、ラッタフルフルフル、ラッタッタフルフルフルとおどりつづけた。虹の色をした七色の目玉が、たからものようにピカリピカリと光りました。

タロウは、ねこのダンスに見とれていましたが、青い目玉の光るのを見ると、どうしてもクロッペにおもえてしかたがありませんでした。とうとうタロウはいいました。

「おじいさん、その青い目のねこをぼくにください。」

おじいさんはびくりして、笛を吹くのをやめました。

「とんでもない坊や。これをやるわけにはいかないよ。これは、わたしの七色の目のおそろいねこなんだから。」

「おそろいな……」

「ああ。だが坊や、おまえさんにつつなものをあげようよ。おまえさんが、いまほしいとおもっているものを、なんでもあげるよ。」

「青い目のねこのほかに。」

「ああ、ねこのほかに。さあなにがほしい。世界中の子どもの絵本かい。積木かな……それとも、くじゃくの羽のついた帽子かな。」

「ああ、ぼくくじゃくの羽の帽子でいいや。」

「そうかい、そうかい。帽子とな。くじゃくの羽の。」

それから、おじいさんはいいました。

「じゃあ坊や、おまえさん、この七匹のねこの七色の目玉のう

ち、おまえさんの好きな目玉をじっと指さしておいで。そうしてわたしが、うたをうたうから、そのあいだじっとそうしているんだよ。」

タロウはいわれたとうり、人さし指をだしました。七色の目玉のねこが、みんなタロウの方をむきました。タロウはやっぱり、青い目玉のクロッペにたねこの目玉を指さしました。

おじいさんは、いい声でうたいました。

坊やのねがい、かわいいのぞみ、

くろねこさんよかなえておやり、

青い目玉がクルクルまわる。

タロウの指さしている黒い目玉が、おじいさんのうたにうたにあわせてまわりました。そうして、おじいさんのうたがうたいおわったとき、タロウの頭の上には、もうくじゃくの羽のついたむらさき色の帽子がのっかっていました。

「ありがとう、おじいさん。」

けれどもおじいさんは、それにはもうこたえずに上着の小さなポケットに七匹のくろねこをしまいはじめました。いっとうさいごに青い目のくろねこをしまうとき、おじいさんはちよいと、タロウの顔をのぞきました。タロウは、ただだまって、おじいさんうなずいて見せました。

おじいさんは、ぜんぶのくろねこをしまいおえると、笛を吹き

ながらまた一本道を、おどりながらかえっていききました。

くじゃくの羽のついたむらさき色の帽子をかぶって、タロウはいつまでも、おじいさんのおどっていくうしろすがたを見ていました。

やがていつのまにか、おじいさんのすがたは見えなくなり、おどけた笛の音だけが、青い青い空から聞こえていました。

タロウは目がさめたとき、空から笛の音が聞こえているような気がしました。

タロウは空を見ました。でも笛の音はどこからも聞こえてはきませんでした。それに青い空は見えなくて、もうすっかり夕暮れでした。

タロウはねいすからおきあがろうとしました。そのとき、タロウはやっと、クロッペがひざの上にいるのに気がつきました。

「なんだ、クロッペいたの。」

タロウはそっと、クロッペの背中をなでてやりました。水にぬれたクロッペのからだは、もうすっかりかわいて、くろくつやつやとしていました。

それから赤い夕日をうけた青い目は、さっきのまほう使いのねこよりも、もっとピカピカ輝いていました。

(東京・淡路町幼稚園)